

# アダンの木陰に残光を観る 『田中一村作品集』

日本放送出版協会

本田 和子

田中一村が帰って来た。日曜美術館が、久しぶりにこの人を取り上げたことで、作品集が静かなブームを呼んでいるという。故郷を捨てたこの人は、亜熱帯の植物と黒潮の香に魅せられ、奄美の島に移り住んで、死に迎え取られるその日まで、名瀬郊外の陋屋で、ただ一人、画筆を握り続けたと伝えられる。

画題に選ばれたのは、樹木や花々、鳥や虫や魚たち。鋭く凝視して止まない彼の視力は、うっそうと茂り合う樹間の薄闇に、あるいは潮風にさらされる孤独なアダンの実に、飽くことなく注がれた。

南の島では、風までも呼吸を殺すのだろうか。海の上を雷音が鳴り渡ろうとも、波を稲妻が白く切り裂こうとも、林の中はただ静かで、熱い緑の精気だ

けが充満し、植物たちが音もなく枝を広げていくらしい。ピロウ樹やダチュラ、そしてコンロンカ、サンダンカなど、その名から既に「奄美」と響く植物たちは、それぞれ孤独に、それこそ「植物的」としか言いようもない無関心さで、勝手な方向へと繁殖し、枝を広げ、蔓を絡ませる。

結果として、彼の画面は、余白もなく、これら亜熱帯の草や樹木で埋め尽くされる。迷い込んだ蝶までもが、植物的精気に呪縛されたかのよう……。動くでもなく止まるでもなく、ゆるやかに、さながらに入眠状態の舞いを舞う。

密集した樹木の間から、それでも透けて見える海面の、波立ち揺れるその動きの、これもまた何と静泌なこと……。雷雲の下で海は小止みなく泡立ち波立ってはいるのだが、しかし、画家の絵筆は、その揺れ動く形のままに画面に封じ込めてしまう。彼の画筆が把えたのは、生命力、流動性、波動現象など、本来は動くことを指し示すことばたちが、その

実、声もなく「静泌」であるということであるらしい。

そのゆえでもあろうか、彼の作品の前に立つとき、観る者たちは心を打たれるのでなく、心を吸われる。しかも、画面は、こうして吸い込んだ「心たち」とも無縁に、それぞれのありようで、植物たちを、あるいは虫や鳥たちを、勝手に繁茂させ、棲息させ続けている。だから、吸い込まれた「心たち」は、動きを忘れた蝶のように、どこやらに呼吸を殺して身を潜めるしかすべもなくなる。一村作品に対するとき、私も観る者たちが、ただ、ことばもなく放心するのはこの所以である。否、より正確に、「心もなく、放心する」とこそ言うべきかも知れない。

中央の画壇とは無縁に死んだこの人を、初めてブラウン管に乗せたのは、地方局で地域の問題を追いつけていた一人のテレビ・ディレクターの熱意であったという。描き遺された一枚のデッサンに、目

を奪われたとのこと。NHKの「日曜美術館」で放映され、視聴者の反響に押されて展覧会も催されて、彼の作品には、つかの間の熱い視線が注がれたのだ。一九八五年、夏の終わりの出来事であったかと記憶している。そして、彼の名前は、慌ただしい一瞬のブームの後には、また、ひっそりと、そう、彼の作品さながら、そのまま静まり返ってしまったかと思われた。

しかし、久々のカムバックの報に、私は、作品集を手にする人が増えていることを喜んでいる。なぜなら、「視ること」とりわけ「凝ること」という、視力だけによって生きることの栄光と悲惨を、こんなにも見事に表現してくれる世界は、そうさらにはないのだから。

一村は、「部分」を「凝視する」人であった。「俯瞰する」という視力は、この人のものではない。部分への惜しみない凝視と、細部との濃密な交流。彼の画筆は、その所産として生気を帯びて動き出すの

であろう。そのとき、俯瞰する視線にさらされない細部は、第三者的統一から逃れ、隣接しつつも独立した個体として画面に置き並べられる。固有の精気を充満させつつ、孤立して併存するそれぞれの「部分」は、決して求心的な「一枚の絵」という全体に回収されない。

画中に漂う不思議な静かさは、一村の感性がどの部分にも「同じ量だけ」注がれているからだとは、美術史家の小林忠氏の指摘であった。そして、氏は、江戸期の花鳥画家伊藤若沖との類縁性を指摘する。そう、確かに、俯瞰しないという点から言えば、そして、また、そのゆえの非全体性から見るなら、彼のまなざしは、若沖らに等しく近代以前のものかも知れない。

とすれば、「奄美の杜」などと仮りそめに付された画題を主題として受けとめようとするとき、観る者の視線が、奇妙な裏切りに翻弄されるのは、この前近代性に負うということになるか。主題によつ

て把握すること、それ以外の観方を忘れた私どもの目の小賢しい近代性は、画面一杯に限りなく延び続けるガジュマルの根や、根元に咲く一輪のハマユウ

によって、さりげなく無化されてしまうのだから。

(聖学院大学)

## 子どもがすすめる本

湯沢 朱実

小さな家庭文庫の中で、子どもが三十冊の本を読むたびに「好きな本は？」と問いつづけてきた十三年の記録から、上位の何冊かをご紹介します。

いので、お母さん達には敬遠されがちです。けれども私は、この本を読んで、子ども達が退屈したという経験がありません。

『ひとまねこざる』H・A・レイ文・絵 岩波書店  
このシリーズは、どれも字が多く絵本としては長

アフリカからやってきた好奇心の塊のようなこざるのジョージがおこす騒動に、子どもは夢中になります。ジョージは痛い目にあっても、叱られて

